07
宮城県
石巻市

小林武史（一般社団法人APバンク）

地域を生かす芸術祭で持続的な復興支援

日本の音楽シーンの第一線で活躍する小林武史さんが実行委員長となり、アートを通して宮城県石巻の復興をサポートしようと始まった「Reborn-Art Festival（リボーンアート・フェスティバル）」。この取り組みへの小林さんの思いを、RAF実行委員会事務局長の松村豪太さんに聞いた。

取組のPOINT

- ヒト　持続的な支援を構想
- 着眼点　震災前より魅力的に
- 連携・協働　地域へのインパクト
- 持続性　地元へバトンを

DATA

- 取組主体　一般社団法人APバンク
- 取組内容　芸術祭開催による復興支援
- 人物紹介　RAF実行委員会事務局長 松村 豪太（まつむら ごうた）

宮城県石巻市出身。「世界で一番面白い街をつくろう」をモットーに、2011年５月、地域課題の解決に挑む「ISHINOMAKI2.0」を設立、2012年には法人化し代表理事に就任。現在は、RAF実行委員会事務局長も兼務し、石巻の持続的な復興支援に取り組んでいる。

ヒト　持続的な支援を構想

APバンクによる復興支援プロジェクト

一般社団法人APバンクは、持続可能な社会づくりや環境プロジェクトへの融資を行う団体として、小林武史さんがMr.Childrenの櫻井和寿さん、坂本龍一さんとともに2003年に設立された。東日本大震災の発生直後の2011年には、東日本大震災支援のために「ap bank Fund for Japan」を立ち上げ、募金活動や災害ボランティアの派遣、復興事業への人材派遣などを行った。宮城県石巻市での活動は、石巻専修大学構内に設けられた石巻市災害ボランティアセンターのテントサイトを拠点に展開された。一方、石巻では同時期の2011年、松村豪太さんを中心に震災後のまちづくりを考える団体「ISHINOMAKI2.0」が結成され、さまざまな活動を行っていた。

宮城県の牡鹿半島を中心に芸術祭を構想

Reborn-Art Festival（以下、RAF）が生まれる最初のきっかけは、松村さんとAPバンクの出会いだ。同年10月に開催された「第１回TEDxTohoku」で、松村さんとAPバンクの江良慶介（えら けいすけ）氏がともにスピーカーとして登壇し知り合った。これは、さまざまな分野で活躍する人が社会課題の解決のためのアイデアを提案し、聴衆と共有するイベントだ。「単に震災前の状態に戻すのではなく、もっと面白い街をつくる」ことを目指していた松村さんと、「一時的な復旧支援だけでなく、持続的に支援したい」と考えていたAPバンクの小林さんや江良さんは互いに共感し交流を始める。2013～14年、石巻の若者を対象に、街の価値や課題を探る連続ワークショップ「世界で一番面白い街をつくろう実行委員会」を共催。最終回に参加者たちは「石巻で芸術祭を開く」という提言を打ち出した。これを実現しようと2015年に実行委員会が組織され、RAF構想がスタートした。コンセプトは「石巻を舞台にしたアート・音楽・食の総合芸術祭」。名誉実行委員長に村井嘉浩（むらい よしひろ）宮城県知事、実行委員長に亀山紘（かめやま ひろし）石巻市長（当時）と小林武史さんが共同で就いた。

開催地には宮城県の牡鹿半島と石巻市街地を選んだ。震災

で多大なダメージを受けた牡鹿半島は、自然と資源が豊かでリアス海岸の地形も美しく、非常に高い可能性を秘めた地域。しかも、素晴らしいところでありながら、全国的にも地元宮城県や石巻市でもそれほど知られていない。この場所の価値を丁寧に掘り起こすことに意義があるのではないかと考えたという。

着眼点 震災前より魅力的に

対話を重ね、プランを練る

小林さんは、芸術祭を開いてたくさんの人を呼び、一時的な経済効果を生み出すことだけを目指していたわけではなかった。地元の人たちにとって、震災前より楽しく魅力的な地域を作るような祭りにしたいと考えていた。そのために、自ら牡鹿半島の小さな浜へ何度も足を運び、地元の区長や漁師らと対話を重ねた。そこで聞いたのは、かつて大きな舟運会社の寄港地として栄えたことや、当時の活気、賑わいぶり。懐かしそうに目を輝かせて話す地元の人たちと交流しながら、小林さんたちは牡鹿の浜に継続的な賑わいと楽しさを取り戻すことを考え、計画を練った。

2016年７月、プレイベントとして石巻市で「Reborn-Art Festival × ap bank fes 2016」を開き、ステージライブの他、アート作品の展示やフードブースも充実させ、３日間で延べ4万人を動員した。本祭「Reborn-Art Festival 2017」は翌2017年夏に51日間にわたって開催。牡鹿半島と石巻市街地で50組以上のアーティストが主に屋外で作品を展示し、さらに音楽や食も楽しめるイベントで、延べ26万人の来場があった。その後2019年に第２回、2021年に第３回を開催。2022年にも開催を予定している。

「分かりづらいイベント」に秘められた魅力

復興支援イベントといえば有名人やアイドルがパフォーマンスを行いご当地グルメの屋台が出るというスタイルがお決まりの中、RAFは一言でいうと「分かりづらいイベント」だ。会場は点在して移動にも時間がかかる。メインステージや「お祭り広場」も設置されず、ゲリラ的に企画される催しもある。「しかし、それこそがRAFのアイデンティティ」と松村さんは話す。地元の人も知らないぽっかり開けたビーチや、廃校になった小学校校舎、街なかの使われていなかった建物……それらを活用してアートを展示し、来場者に巡り歩いてもらう。途中で出会う景観や自然の美しさ、地域の文化や価値に触れてもらうことにこそ意義がある。

地元住民には開催前はいくら言葉で説明しようとしてもなかなか伝わらなかったが、始まってみると「腑に落ちた」という声も出てきたという。特に長い期間をかけて話し合い

TEDxTohoku会場の様子

と説明を重ねてきた牡鹿半島のアート会場となっている浜の人々は絶対的な理解者で、「今も偉大な応援団として支えてもらっている」と松村さん。

石巻の新たなランドマークとなった常設作品「White Deer(oshika)」
〔作者：名和 晃平〕

連携・協働　地域へのインパクト

市民による実行委員会の誕生

一方、RAFはアート業界の専門家や評論家の間での評価は非常に高く、また首都圏をはじめとする県外客の注目度も高い。その反面、石巻中心部への浸透が十分に進まないことが課題だった。それはひとえに、イベントの分かりにくさによるものだ。2017年の本祭後、事務局長として次の開催までにどうにかしなければと奮闘する松村さんに、強力なサポーターが現れた。石巻商工会議所の当時の会頭、浅野 亨氏だ。浅野氏は商工会議所の会員等に「RAFは石巻にとってまたとないチャンスだ」と何度も訴え、「われわれは協力するべき」と説得を重ねた。さらにRAFをより深く知るための会を開き、松村さんに説明する機会をくれた。

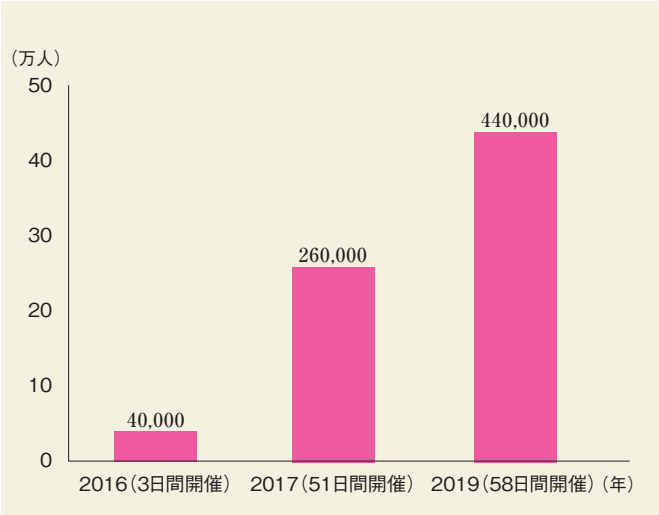
これらの活動の成果で2018年３月、市民らが「RAF石巻実行委員会」を結成。本祭開催中にRAFと合わせて石巻の観光資源を紹介するバスツアーを企画したり、盆踊りをモチーフにした「リボーン踊り」で地域を盛り上げたりと、自発的な動きが生まれた。

「リボーン踊り」会場の様子

持続可能な復興支援

持続的な復興が形として見える連携の例として、一つは牡鹿半島桃浦地区の「もものうらビレッジ」がある。以前から課題だった過疎化が震災で急速に進んだ桃浦で「地区を消滅させてはいけない」という地元住民の思いに応え、2017年にAPバンクが宿泊施設を建設。RAF期間中だけでなく日常的に活用して、漁業体験や語り部の会などを開き、地域内外の人の交流の場となっている。

■ Reborn-Art Festivai延べ来場者数



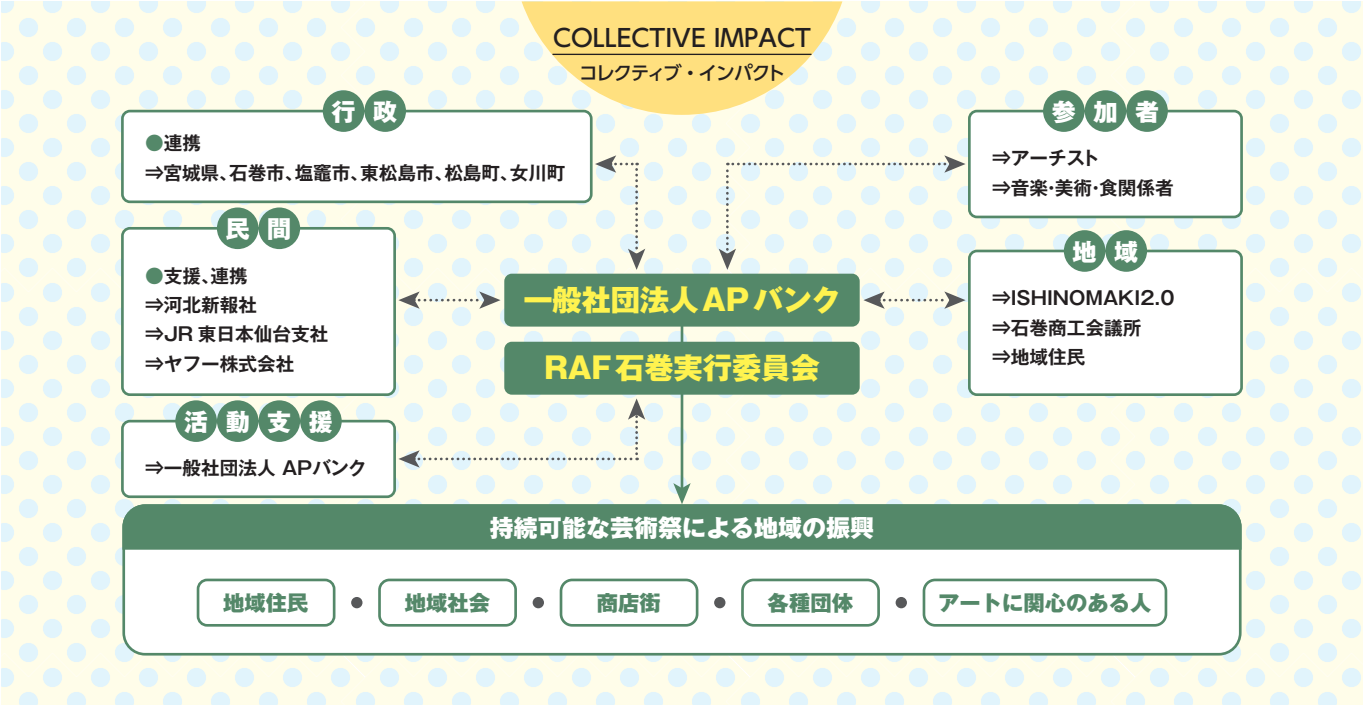
※2016はReborn-Art Festival × ap bank fes

もう一つ、地域の課題を経済活動に結びつけたのが、2017年にRAFの食のプロジェクトとして設立した鹿肉解体処理施設「FERMENTO（フェルメント）」。野生のシカは牡鹿半島で年々個体数が増え、食害などの問題が大きくなっていたが、これを単に駆除するのではなく命を循環させ資源として生かすことを目的とした。現在はソーセージやハンバーグなど食肉加工商品の開発もしており、ジビエという新しい名産の可能性を発揮している。

持続性　地元へバトンを

RAFを活用して自分たちが立ち上がる

RAFは当初から一過性のイベントではなく、持続性をもって復興に寄与することを目的としていた。少しずつ地域へ運営のバトンを受け渡すことを念頭に、しかし、まだ津波被害の跡が生々しく残る第１回は小林さんを中心とするAPバンクが全面的に開催を担った。地元・石巻の住民にとっては、長い会期、広範囲にわたる会場設定、アートと音楽と食の融合による新しいタイプの地域型芸術祭は経験がなく、体験して初めてその魅力に触れた。被災した住民の中から、RAFを享



受するだけでなく、RAFを活用して自分たちが立ち上がっていく動きが生まれたことは、持続性への一歩だった。第２回の本祭では、バスツアーなど地元の石巻実行委員会メンバーによる取り組みが始まり、第３回に向けてはさらに発展的に活動が進められた。新型コロナ感染拡大の影響のある中での第３回は、2021年夏、22年春の２期分散開催を決めた。

FERMENTO外観

加工されたソーセージ

石巻をアートのメッカに

全国的に知名度が高まり、コアなファンも増えてきたRAF。これからは開催を通して培ったノウハウや人脈を生かしてクリエイターとコラボを企画したり、地元の食材や生産者と組んだ商品を開発したり、さまざまな可能性を模索し、地元へ経済的なインパクトを与えることを目指す。

RAFの中核はアートだ。松村さんは「アートは経済的な合理性や損得勘定ではなく、心の赴くままに表現したり行動したりするもの。今、疲弊し縮小する地方社会には、経済だけでなくこのようなアートが重要な役割を果たせるのではないか」と話す。RAFをきっかけに、アートを志す若者が石巻に移住したり拠点を作ったりする事例も増えているという。「石巻がアートのメッカになれば、すごく面白いことが起きる」と目を輝かせる。RAFを重ねながら、石巻がこれまでにない魅力をまとい面白い街になっていく。

石巻実行委員会メンバーによるモニターツアーの様子

本事業例の問合わせ先

一般社団法人 APバンク

東京都港区
HP：https://www.apbank.jp

持続可能な社会をテーマに、自然エネルギーや環境保全の支援・推進、東日本大震災の復興支援など、さまざまなプロジェクトを立ち上げ活動を展開している。